

「一」の文法

京都教育大学教授 森山 卓郎

27

下の子が最近保育園でオセロゲームを覚えてきたので、ときどき、お相手をさせられる。ちよつと暮に似た、白と黒が裏表になったあのゲームだ。実は私は相当弱い方だが、もちろん、相手はふつうの五歳の幼児だから、まあ、それでも私が勝つ。

さて、こういうゲームで、「一手」という言葉を言うが、この読み方は、「いって」なのか、「ひと」なのか、ふと迷うことがある。また、「いちて」とは言わない気がする。考えてみれば、「一」の読み方にもルールがありそうだ。さらに「一勝一敗」と言うときは、「いちしょういちはい」とはあまり言わないで、「いっしょういっしょう」と言っほうがより自然だ。「一」は「いっしょういっしょう」「いっ」「いっ」となるのだらう。

まず、「ひと」と読むのはどんな場合かと言えは基本的には後に和語が来る場合である。例えば、「まわり」「くち」などは「一回り（ひとまわり）」「一口（ひとくち）」のようになり、「ひと」と読むのがふつうである。「われはそもそもひと」が和語だからだ。「一+悶着」のようになると続くのが漢語なのに「ひと」と読む例もないわけではないが少数

派である。また、表記上、例えば、「一騒ぎ（あつた）」「塩を（一ふり）ではなく、「ひと騒ぎ」「ひとふり」のようになり、「ひと」と書くことも多い。これらの場合、数字的な意識がそれだけ薄くなっているといふこともしれない。ちなみに、中には「ひと」「ふた」などとは言っが、それ以上はあまり言わないというものもある。「塩を三ふり」などといふことなどはまだしもあるかもしれないが、「騒ぎ」「もめ」などは、「ひと」「普通で、ゆうべ三騒ぎした」「昨日そのことで五もめあったんだ」などとは言わない。これらの場合、数字の入った言葉という意識はもはやないと言える。

先述の「一手」も「手」が和語だから、「ひと」と読んでもよさそう。ただし、「手」という一音なのでなんとなく漢語のような印象もあり、「いって」とも読める。この点、足（あし・そく）のほうは、漢語が和語の使い分けがはっきりしていて、「一足」は、和語で「しなら」「ひと+あし」、漢語同士なら「いっ+そく」というように、同じ「一」でも読み方はきちんと使い分けられていて、意味も違っている。

さて、次に、「いち」「いっ」の読み分けだが、これは純粹に音の問題のようである。すなわち、「一軒」「一個」「一冊」「一勝」「一反」「一頭」「一本」「一歩」のように、後にK、S、T、Pなどの音がくれば、「一」の発音は「いっ」となる。一方、「一合」「一膳」「一段」「一番」のような濁音や、「一年」「一

つている。「一」でも、いわばほかと比べつつ外からみる視点と言えようか。「一」ならではの意味の広がりと言えそう。

これと関連して、「一考」「一見」「一案」などは微妙な用法と言え、「それもあるなあ」というとらえ方になっている。いわば「物の数には入る」というとらえ方で、「一」になっているという感じだ。

このように、「一」という数は言葉のうえででもおもしろい。挨拶などで「一度遊びにいらしてください」と言つのも、「二度目はもう行つてはいけなんだ」「などということではない。「一度でもいいから」といふことであつて、存在としての「一」が問題になっているわけだ。また、よく隣接する数字を二つ並べて「二三」にさん、「ふたつみつ」などと言つが、「れいいち」のように「零」と「一」を並べて言つことはない。やはり「零」「一」には無と有の質的な絶対的違いがあるのだ。言葉としての「一」には「存在」あるいは「有」という実に重い意味がある、と言えは言い過ぎだろうか。

さて、タベはそんなふうに「一」の読み方だとか意味だとかを考えながらオセロゲームをやっていたら、なんとあれよあれよと一瞬のうちに色を変えられた。この一手で見事一本！と大喜びの娘を見ながら、うーむ、今回は一敗を喫したが、こんなことは万に一つのこと。一事が万事、こんな一発逆転というわけにはいかないんだぞ、と一人負け惜しみを言う一夜なのであつた。

連載

文法楽



一夜「一羽」のようになり、後にN、M、Y、Wという音がくると、「一」は「いち」と発音される。後に母音がくる場合も、「一案」のように「いち」となる。漢語としての「一」の読み方は、カ、サ、タ、パ行（すなわち清濁のペアがある清音）の場合には「いっ」、それ以外は「いち」となる。とまとめてもよい（発音のとき声帯がゆれない、いわゆる無声音）。なお、八行の場合には、実はパとバが無声と有声の対立である。もとも「一」という漢字の音は後に子音が残る発音（「イッ」）だったので、後の音の性質によって発音が違ってくるということのようだ。

というわけで、「一手」「一勝」は「いちて」「ちしょう」ではなく、「いって」「いっしょう」というように読むほうが普通なのである。

考えてみると、「一」の意味もおもしろい。「一家」「一生」「一門」「一座」などは「全部」という意味である。一方、「一閃」「一瞬」「一時」などは「少ない（＝全部ではない）（「一」という意味。これはまるで正反対ではないか。

前者の場合、「一つの生」「一つの家族」といった「まとまり」があり、そのすべて、という意味になっているとみてよい。いわば、「一」というまとまりを内側からみる視点と言えようか。これに対して、後者の場合、あくまでも「ひとつ」「でしかない」というとらえ方。つまり、「一部」という「部分性」がない。「一」の最小という意味が強調されることにな